学習院大学新聞

発行所
学習院大学新聞社
〒171-8588東京都豊島区
目白1丁目5番1号
電話03(3986)0221内線2607
http://www-cc.gakushuin.ac.jp/~press/
press@gakushuin.ac.jp
発行・編集人　北岡恵子
年間500円

法科大学院

充実の二年目始まる

昨年開校した本学法科大学院。新司法試験を突破するため、全国から志願者が殺到した。一年が経過した今、状況はどう変わったのだろうか。

平成十七年度の法科大学院入試結果が公表された。既修者五〇名、未修者一五名、計六五名の定員に対し、志願者数は各二三八名、一四二名、計三八〇名。最終合格者数は各五七名、二七名、計八四名で、倍率は四・五倍であった。一五倍だった昨年度に比べると大きく減っているが、全国的に大幅な減少傾向にあるため、本学にしても当然の結果と言えよう。要因としては、昨年度数多くの法科大学院が開校したため、当初の「新司法試験での合格率七割」という目標を各大学とも下回る可能性があるためだ。しかし現行の司法試験に比べれば合格者数が大幅に増えることは確実であり、はっきりした理由は分かっていない。

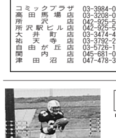
最終的に入学者数は、既修者三五名、未修者一八名（休学者一名含む）の計五三名となった。六五名の定員を割ったことについて、法科大学院法務研究科長、戸松教授は「定員通りにするため、無闇に合格者を増やすより、学生の質を保つことが何よりも大切と考えたからです」と理由を語る。今年度も七科目すべての筆記試験を実施し、厳正な入試が行われた。このような姿勢が学生の高い質の維持に繋がっているのだろう。入学者は一五大学と多くの大学から集まった。また出身学部についても、法学部以外の学生も多い。さらに社会人も多く多様な学生層となっており、お互いに良い刺激を与えているようだ。

設備面では、北一号館二階に法科大学院生のためのロッカールームと自習室を増設するなど、さらなる充実が図られている。さらに最終的に三五名になる予定の教員数についても、昨年度より五名増加し三〇名となった。これにより、本学法科大学院の特徴である少人数教育がさらに徹底されるだろう。経験豊かな実務家教授と優れた研究者教員とが行う少人数教育は、学生の要求を満たすに十分な環境となっている。ちなみに、この少人数教育については文部科学省から補助金を受けている。その他の教育内容については昨年度と変わらず、計画通りだ。

新司法試験の開始を来年に控え、本学法科大学院の二年目が始まった。試験に合格するためだけの場所ではないが、今後の指針となることは間違いない。本学法科大学院で学んだ学生の、二年間の真価が問われることとなる。

平成17年度 入学者出身大学一覧
学習院大学
慶應義塾大学
國學院大学
上智大学
中央大学
東京大学
東京都立大学
日本大学
一橋大学
北海道大学
明治大学
明治学院大学
立教大学
立命館大学
早稲田大学

五十音順



4 アメフト部圧勝

アメリカンフットボールの四大戦が行われ、本学は成蹊大と対戦。終始寄せつけず、50－7で完勝した。

紙面紹介

2 学習院大学改革案に迫る

3 大学生の醍醐味 男女の交流会

芸術のある風景

五月某日・岩崎邸

上野、不忍池から徒歩数分。三菱創始者の長男の旧宅である岩崎邸。和洋折衷の [illegible] は、今も美しさに陰りがない。（鳳）

目的に応じて

多彩な助成金

輔仁会大学支部に所属している部や同好会等の活動資金は、輔仁会大学支部予算から各団体及び行事に配分されている。しかし、その資金ではまかないきれないことも多々ある。その場合、各団体で部費を徴収したり、OB・OGからの援助を受けたりして、それらの不足分を補っているだろう。そのような不足分のために、学校関係（法人・大学・学習院父母会・桜友会）より助成金が援助されている。目的別に以下のようなものがある。

一、日常の活動に対する助成
- 学習院課外活動助成金（特別助成金）
- 課外活動助成費（運動部助成金・文化系団体助成金）
- 学習院父母会課外活動等助成金（一般助成金）

二、全国大会出場等優秀な成績を収めた時の助成
- 輔仁会激励金（全国大会等出場）
- 課外活動助成費（全国大会出場の場合、交通費・宿泊費の補助）
- 学習院父母会課外活動等助成金（優秀賞）
- 桜友会輔仁会活動に対する助成金（東京都大会三位入賞以上）

三、記念行事・海外遠征・記念公演等への特別助成
- 学習院父母会課外活動等助成金（特別助成金）
- 桜友会輔仁会課外活動に対する助成金（個別審査）

四、監督・コーチ等への年末謝礼
- 学習院課外活動助成金（監督・コーチへの年末謝礼）
- 課外活動助成費（監督・コーチへの年末謝礼）

五、各団体共有して使用する備品等の購入
- 学習院父母会助成金（共有物の購入）

公募のものは、掲示や運動部常任委員会、文化部常任委員会及び文化系同好会常任委員会等を通じて募集している。また、全国大会出場等申請該当事例がある場合は、学生部で受付けているので、申請受付の時期及び条件を確認の上で申請すること。詳細は学生部窓口まで。

助成金制度の存在を知ってはいるが、その種類や申請方法について知らない団体も多いだろう。各団体ともそれぞれ該当する目的に合わせ、是非活用してほしい。

トレーニングルーム

昨年度の利用状況

今年で開室三年目を迎えたトレーニングルーム。昨年度の利用者数は延べ三万人で、一昨年度と同程度の利用者数となった。

年間の男女別利用者数を見ると、学生は男子の利用者が女子の約三・五倍と圧倒的多数を占めている。また教職員の利用者数はほとんど増減が見られなかった。だが、九月から十一月にかけては男性教職員を対象にフィットネスプログラムが行われたため、一時的に利用者数が増加した。

月別利用者数では六月の利用者が最も多かった。六月は新入生がトレーニングルーム講習を終え、登録を済ませる時期に重なる。そのために利用者が増えたようだ。一方、長期休業中や試験期間には、やはり利用者は少なかった。また登録者数は大幅に増え、学生が四二四二人、教職員が二四八人となった。これは一昨年度の二九一〇人、一八三人に比べて、大きく伸びた。

トレーニングルームの利用について、スポーツ・健康科学センターの高丸功講師は「部活を終え汚れた服で、あるいは土足のままで来室する人がいますが、清潔な格好で使ってほしいです。それから器具を粗雑に扱わないように気をつけていただきたいですね」と語る。さらに、利用者の多い時間帯が三限後や四限後に集中するため、「のんびりやりたかったり、トレーニングのアドバイスを受けたいと思うのなら、午前中がいいと思いますよ。午前中は有酸素運動する時にも適していますしね」とトレーニングルームの加藤浩人助手。これから利用しようと思っている人にそう勧めてくれた。

サウンド　オブ　めじおん

人々が衣替えを始める頃、本学では毎年、夏をよびおこすイベント、目白音楽祭（通称・めじ音）が開催される。開催期間中の昼休み、音楽系の部活およびサークルが日替わりで演奏を繰り広げるのだ。演奏が始まると、学内に躍動感あるサウンドが響きわたる。音楽だけでなく、演奏者が青空の下で元気に披露する姿も情熱的だ。連日、大勢の学生が集まり、時間が経つのも忘れて演奏に聴き入っていた。（紫）

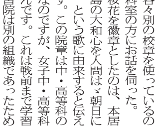
素朴な疑問

あれ、校章が違う!?

何気なく学習院のパンフレットを見ていたら、本院の校章は本学、女子大学、中・高等科、女子中・高等科と、すべて違うことに気づいた。本院の院章もあるのに、なぜ各々別の校章を使っているのか。院史資料室の方にお話を伺った。

「もともと桜花を徽章としたのは、本居宣長の『敷島の大和心を人問はゞ朝日に匂ふ山桜花』という歌に由来すると伝えられています。この院章は中・高等科の校章と同じなのですが、女子中・高等科は八重桜なんです。これは戦前まで学習院と女子学習院は別の組織であったためと考えられます。なぜ女子中・高等科が八重桜になったかははっきりしませんが、女学部時代の八重桜が描かれた書籍や器物が女子学習院に伝わっており、華族女学校時代から使われていたとも言われています。昭和八年に女子学習院の院章と定められ、それ以来女子の校章は八重桜になっているのです。実は幼稚園も初等科も男子と女子で校章が分かれているのですが、これも設立が異なったゆえの名残りなのでしょうね」

校章はその学校の歴史の深さを示す。校章の違いを通し、本学のゆかりを垣間見た気がしないだろうか。（唯）



校章：学習院（右上）、本学（右下）、女子大学（左上）、女子中・高等科（左下）

省エネ化へ取り組む

黎明会館

先月、黎明会館地下一階の男女更衣ロッカー室で人感センサー取付工事が行われた。省エネルギー化に伴い、照明の消し忘れを防止するためだ。人感センサーは人の気配に反応し、自動で照明が点灯するもの。また人の気配がなくなると、一定の時間で消灯する。つまり西二号館のトイレなどと同様のシステムだ。

本学は『省エネ法』により、「第一種エネルギー管理指定工場」に指定されている（電力使用量一二〇〇万kwh／年以上の会社・学校等が該当）。これに伴い、経済産業省への定期報告書のほか、省エネルギー目標達成のための中長期計画の作成・提出などが義務付けられている。本学は今後も順次、各建物への同センサーの設置を進めていく予定だ。

また、省エネルギー化を推進するには学生の協力も必要だ。最後に教室から退室する際には照明を消すなど注意を払ってほしい。

明窓浄机

『感謝』。それはあまり親しくない人には [illegible]（審）

学習院 研究最前線

学問研究の「いま」

「電力自由化と公益的課題」

経済学部経済学科 巽直樹特別客員教授

今回は経済学部経済学科の巽直樹特別客員教授です。電力会社に勤務し、経営戦略や公益事業について研究なさっています。今回はその中でも、電力業界について伺いました。

（取材・構成　北岡恵子）

◇

ディーラーから電力会社へ

先生は法学部を卒業後、銀行へ就職。国際金融市場を舞台に、為替ディーラーを務めてきた。しかし二〇〇〇年、十年以上働いてきた銀行を退職し、電力会社へ転職している。その転機とは。

「私が銀行に勤めている間、九〇年代後半の金融危機や不良債権処理問題など、さまざまなことがありました。そんな中、自分がこのままこの仕事を続けていけるのか、と考えるようになったのです。そこで、銀行で身に付けた知識やスキルを生かせる場所はないかと探しました。そうして見つけたのが電力業界です。転職後はさらに必要な知識を得るため、仕事をしながら大学院に通いました。エネルギー企業に関する経営戦略の研究を進めていくうち、気がつけばミクロ経済も研究するようになっていました」

電力業界の変貌

電力というと公益事業であり独占である、というイメージが強い。実際はどのようになっているのか。

これからの電力産業

「現在日本には地域フランチャイズで一貫体制の電力会社は十社しかありません。この体勢となった経緯には、歴史的要素が大きく関わっています。日本の電力会社は設立以後、そのほとんどの期間が民営でした。民営であることは公営であるよりも効率が良いと言えます。また、電力産業は規模の経済が働いており、自然独占である方が効率的であるとされていました。そのため、厳格な規制の下、地域ごとに分けて運営する体勢が採られたのです」

かつて、電力業界は独占市場といわれてきた。しかし一九九五年以後、自由化が浸透してきたという。

「自由化が進み将来が不確実となる中、電力会社も設備投資額を大きく下げるなどコスト削減に努めました。九〇年代後半、日本が長引く不況にあえぐ中、同時期に経済成長を遂げたのは米国です。その原因が主に規制改革による成果であるとされたことから、日本も米国と同じ取り組みを行おうという機運が高まりました。当時、米国では電力自由化が先行していました。これを、日本も導入しようとしたのです」

理想の競争市場とは

しかし、現状では電力会社は国内に十社しかない。そんな中での競争市場とはどのようなものなのか。

「どんな業種であっても、独占であれば内部に非効率を抱える事は宿命です。それは電力会社にしても同様で、競争市場になれば現在より効率化するという期待は高まります。しかし完全に、全てを競争化することは不可能です。例えば、ネットワークの問題です。黎明期には同じ地域で二つの会社が別々に配電線を設けるという珍事が実際に起こりました。電力を供給するには電線が必要ですが、それを各社ごとに二重に設置するのは無駄です。つまり、自由化と言ってもこのような自然独占の設備の運用を巡っては、これからも規制が必要なのです」

自由化の弊害

また、同時に自由化による弊害も考えなくてはならない。実際、米国での電力自由化は、大規模な停電を引き起こすなど、多くの問題を生んだ。

「米国では市場の制度設計を誤ったカリフォルニア州で電力危機が発生しました。その後の北米大停電は、競争激化による設備投資削減の弊害であると言われています。自由化も度を越えるとさまざまな問題が発生します。日本でもこの四月から卸電力取引所が開設され、電気が市場において自由に取引される場が設けられました。実は日本も既に七割近くが自由化対象となっているのですが、残りの部分についても二年後、全面自由化を目指した検討が始まります。日本は非常に安定した電力供給をしていますから、競争の中でもそれらを維持して欲しいですね」

まだまだ自由化への課題が多く残る電力業界。最良の市場とはどのようなものなのか。先生の研究は続く。

97年、香港のディーラー時代

PROFILE

巽直樹（たつみ・なおき）

中央大学法学部卒業、東北大学大学院経済学研究科修士課程終了。東洋信託銀行（現UFJ信託銀行）、東北電力を経て二〇〇五年より現職。

情報特急便

第52回盆石展
細川流東京九曜会盆石展
日時：6月12日（日）～15日（水）
10時～16時
場所：百周年記念会館3階
参加費：無料

就職のためのキャリアアップセミナー④
講演「自分と仕事の発見」
日時：6月15日（水）
場所：西5号館B1教室
備考：1年生から3年生対象

常磐会チャリティー講演会
「21世紀の世界と日本」
講師：明石康氏（元国際連合事務次長）
日時：6月17日（金）
13時30分～15時
場所：百周年記念会館3階小講堂
参加費：1000円

2005年度学習院大学ドイツ文学会 春季講演会・総会
講師：桑折千恵子氏（ドイツ語通訳者）
日時：6月18日（土）
講演会　13時15分～14時45分
総会　14時45分～15時15分
場所：西5号館201教室

第1回就職セミナー
講演「就職活動を考えよう インターンシップ解説」
講師：柳井章氏（株）毎日コミュニケーションズ
日時：6月24日（金）
18時～（約1時間40分）
場所：百周年記念会館正堂

次号（第一九八号）は七月上旬発行予定です。

学習院大学新聞社

学習院大学のこれから

改革 or 継続

少子化が原因か、本学の本年度入学志願者数が昨年より全学部減少した。今号では、そのような背景を踏まえ、本学はどこへ向かおうとしているのか、改革案はあるのかに迫った。

少子化に伴い、入学志願者数の減少は全国の大学に及んでいる。本学も例外ではなく、全学部軒並み減少という厳しい現実を突きつけられた。

この流れを変えるためには、何らかの対策が必要だろう。他大学では、センター試験入試やAO入試の導入、などを取り入れている。しかし、本学は「単なる数合わせ」をしないことを理由に、入試改革を見送っているのが現状だ。また、大学の内容が充実していなくては、受験生の目は引けないと思われるが、そちらも一見して大きな動きは見られない。本学は、望ましい学生を集めるための入試改革案、より魅力的な大学にするための内部改革を考える時期に来ているのではないだろうか。

今号では、本学の今後の展望について特集する。本学はこの苦境の中、どのような態度で将来を見据えているのだろうか。

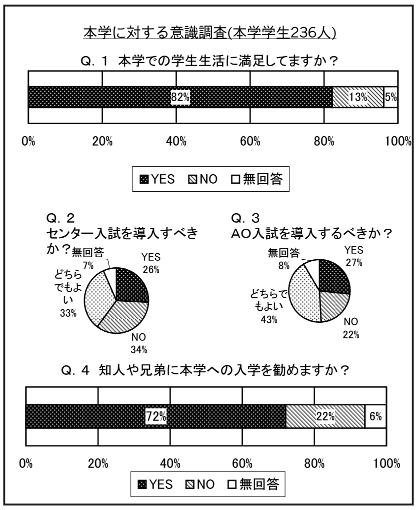
在学生から見た本学

在学生は本学の将来をどう見ているのだろうか。アンケートを行い、意見を集計した。

本学の入試形態の特徴といえば、センター入試とAO入試を取り入れていないことだ。導入すべきかという質問に、大多数が無回答だったのは驚きだ。特にAO入試に関しては「どちらでも良い」「わからない」という意見が多かった。入試形態の多様化は魅力的な大学とは結びつかないということなのか。また、入試改革案としては、入試問題の難易化、新学部（医・薬系）増設などの意見が目立った。

では数多くある大学の中で本学を選んだ理由は何なのだろう。この質問には、圧倒的に立地条件と雰囲気の良さを挙げた学生が多い。入学後、本学の印象は変わったかという質問には「堅いイメージだと思っていたが案外活発」など、印象が良くなった学生も多くいた。

本学はどうしたらより魅力的な大学になるのだろうか。この問いには「部活の活発化」や「履修制限禁止」「学食の改善」など学内充実への意見が多く挙がった。在学生の生活がいかに満足しているかが大切なのだろう。また「このままで良い」という意見が多かったのも事実である。本学の特徴である少人数制のアットホームな雰囲気を残すことも必要なのだろう。本学がより良くなるためには在学生の意見を取り入れ、本学独自の方針を打ち出していくことが重要となるのではないか。（石崎知世子）



学長に聞く

本学はこれからどの方向に舵をきっていくのか。永田良昭学長に、今後の内部改革について伺った。

――内部改革をする上でどのような大学を目指すのか、という方向性が必要だと思います。学長が考える本学の将来像を教えてください。

学長　私は、日本の大学は今後三つの方向に分かれていくと考えています。研究活動に重点を置く大学、社会に出てすぐに通用する即戦力を育てる実務的な大学。そして、高度の教養を育てる大学です。ここでいう教養とは、自ら考える力、物事を調べる力のことです。この中で、本学は三つ目に当てはまると考えています。

――学生の教養を高めるために、どのような改革を進めていますか。

学長　どの進路へ進もうと、対応することができる教養の教育ですね。また大学院に進む人には、高度な研究者になるのに必要な基礎学力を身に付けられる教育を目指しています。そして、実際にそれが適う環境が整えられつつあります。

――自ら調べ、考える力は、本学ではどのような形で培われるのでしょうか。

学長　日常の授業の中で養われます。人数の多い授業もありますが、本学は個々の教員と学生の接触が比較的多い大学です。そのような環境の中で、教養は得られるのだと思います。

――本学が発展するためには何が必要でしょうか。

学長　学生は高い目標を掲げ、それに向かって努力をすることが必要です。目標を実現することで自信が生まれ、更に高い目標が設定できます。それを引き出すために、教員も努力しますが、学生自身も意識して欲しいです。

――例えば大学が、学生の留学制度や資格試験対策のサポートを充実させれば、学生は高い目標を持ちやすいと思います。大学として制度をより充実させるという試みはありますか。

学長　大学全体としてではなく、学部別に動いています。例えば今年から始まった政治学科のFTコース。このコースでは、三年生で卒業し、大学院に入り、高度の専門家を目指すことが可能です。一段高い目標設定ができると思います。とはいえ、やはり特別にコースを設置するのではなく、本学では日々の授業で学ぶという方針です。

――本学で新設学部設置の動きはあるのでしょうか。

学長　検討はしていますが、決定事項はまだありません。本学は看板が変わらないため、昔から同内容の授業をしていると思われがちです。しかし、実際には各学科のカリキュラム内容は大きく変わっています。そして、法科大学院を設置するなど、世の中の流れを意識した改革をしています。必要なところは変わっていかなければなりません。しかし、目新しさを狙って変わっていくようなことはしない、というのが本学の姿勢です。

――学期末に教授によっては授業方針についてのアンケートを配り、学生の意見を募っています。教授と学生間の双方向の関係を持つことは必要だと思いますが、大学規模で行う動きはありませんか。

学長　それについては、一年以上前からFD推進委員会という組織を立ち上げ、検討しています。すべての授業に共通した質問をすることは可能なのか、個々の担当者に任せた方がよいのはどのようなことか。意見を詰めている段階です。

――最後に一言お願いします。

学長　大学名だけで、通用する時代は終わりつつあります。大学で何を学んだのかということが重要になってきました。学生には明確な目標を持ち、大学生活を送って頂きたいです。

◇　◇　◇

本学は、新たに抜本的な改革をせず、現在ある制度を生かして内容の刷新を進めていく方針のようだ。これは地に足つけた姿勢なのか、変化を恐れる保守性の表れなのか、評価は分かれるだろう。これからも、本学の改革の流れを追っていきたい。

（取材・構成　原泰一郎）


高い教養を育てるのが本学の目標と語る永田学長

入試制度を考える

本学の入試改革の動きはどのようになっているのか。有川治男教務部長にお話を伺った。

まず、入試制度を考える上で根本となるのは本学が求める学生像。これについて、部長は「学習院大学としての良さをわかってくれる学生です」と答えた。本学は学部数や学生数を見ても、規模は大きくない。だが落ち着いた雰囲気の中、じっくりと腰を据えて勉強できる環境がある。「そういうところに良さを感じる学生に来てもらいたいです」と、有川部長は言う。

「入学試験では、本学の偏差値を他大学と比較して受験するかどうかを判断しがちです。しかしそれだけでなく、大学自体を知って選んでくれるような学生がいればいいと思いますね」。

では、現状の入試制度を今後変える予定はあるのか。センター試験利用入試やAO入試の導入について聞いてみた。「私立大学がセンター試験利用入試を導入すれば受験者数が増えることは確かでしょう。しかしそれで本当に本学が取りたい学生が取れるかというと、必ずしもそうではありません。独自に問題は作れませんからね」。

しかしAO入試については違う考えがあるようだ。「文学部の公募制推薦もAO入試に近いものだと思います。名前はどうなるかわかりませんが、他の学部にもAO入試に似たようなものができるのではないでしょうか」。

だが実際、本学は他大学に比べ入試改革の動きが少ないように思える。その点については以下のように説明してくれた。「何も面倒で入試改革を遅らせているわけではありません。例えばある年から小論文が導入されたのに数年後には無くなったというようなことは、受験生を混乱させるもとになります。本学のようにいつも同じ体制で入試を行うことは、受験生にとってのメリットにもなると考えています」。

しかし、入試制度以外に改善しなければならない点がまだ多くあるという。「受験生が情報を貰いに本学に来る際、わざわざ本部の四階まで来なければなりません。その上、そこにきちんとした設備があるわけでもないのです。これからは、しっかりとした入試センターのようなものを作る必要がありますね。そういったことも含め、今キャンパスプランを検討している最中です」。

本学は、他大学のように大胆な入試改革を行う予定はないようだ。だが、必ずしも改革すれば良くなるというわけではないかもしれない。

（取材・構成　今村隆介）


笑顔で語る有川教務部長

学習院大学 今までの変遷

本学のイメージとして、常に付きまとうのは「保守的」という言葉。実際、本学は保守的なのだろうか。

一九四九年に、新制大学として誕生した本学は、文政学部と理学部を有するのみであった。当時、すべての人文・社会科学系の学問は、ひとつの学部の中に統合されていたのである。

しかし一九五二年、保護者や学生からの要望により、経済学科が誕生する。当時、旧制高校から昇格したばかりだった本学では「少しでも就職に有利な学科を」という声が強かったのである。そして文政学部は消滅し、政経学部と文学部とができたのだ。

その後の一九六〇年、政治学科に法律専攻コースが設置された。法律を専門的に学びたいという学生が多かったためだ。当時の学習院新聞は「長い間希望されていた法律学科が新設される一段階だと一部では見られている」と報じている。法学科は一九六四年に設置され、その予想は現実のものとなった。そして政経分離も行われ、現在の四学部体制となったのである。

一方、経済・文・理の各学部にも、多くの学科が新設された。だが、一九七五年に心理学科が増設されて以後、本学に新しい学科は作られていない。このことが、本学＝保守的と思われる所以ではないだろうか。

近年、各学部の外国語教育を集約するために「外国語教育研究センター」が開設された。また「英語インテンシヴコース」の設置にも見られるように、学部・学科の改編ではない改革が現在進められている。

（植木太）

編集後記

今回、学習院大学の今後について特集した。大学全入時代を迎え、多くの大学が生き残りをかけて様々な対策をしている。そんな中、本学はどういった態度で生き抜いていくのか。大学と学生の両側から、その向かう道すじを浮き彫りにしようと努めたつもりだ。

取材を進めていく中で、恵まれた立地条件や学術環境、少人数だからこそ可能であるきめ細かな対応など、本学の誇れる点を再確認することができた。しかし、それと同時に感じたことがある。

学生への意識調査、大学側へのインタビューに共通して漂う、危機感の希薄さだ。体制は基本的に現状維持で、変わるべきは各々の心構えだ、と言う。満足できる現状があることは素晴らしいことである。しかし、むやみに革新していくことが必ずしも良い結果をもたらすわけではない。

また、それらを踏まえた上でも、どこかしら「世間ずれ」した発言に多く出会った。古くから続く、本学のノーブルなイメージに安住してしまっているのではないだろうか。

（柳川香里）

企　画	原　泰一郎
構　成 レイアウト	柳川　香里
取　材	石崎知世子 今村　隆介 植木　太 掛川　千尋

記者の眼

笑わない子供たち

英語で「人」を「person」と訳すが、その語源はペルソナというラテン語で「仮面」という意味である。誰しもが、人生という舞台で色々な仮面を付け演じる。それがこの世で生きていくことだと古代の人は考えた。仮面というと、どこかネガティブな印象を受けるが、TPOに合わせ、言葉遣い、表情、服装を変えることは、現代でも人間社会で生きていくうえで重要だ。しかし、一つの仮面――表情しかみせない赤ん坊が増えてきている。

そのような赤ん坊は「サイレント・ベビー」と呼ばれている。笑う、泣くといった情緒や表情に乏しく、本来なら活発なはずの好奇心もみられない。大人しいため、育てやすい子供として解釈されることがあるが、そのまま成長すると、引きこもりや不登校など、社会に溶け込めない可能性があるという。

サイレント・ベビーは先天的に問題があるわけではない。原因は、大きく分けて次の二点にある。一つ目は、赤ん坊へのスキンシップが不足していること。おんぶやだっこをする時間が、ベビーカーやカゴを使うようになり減った。また、共働き、核家族の増加や近所付き合いが薄くなったことによりスキンシップを受ける機会が減ったという社会的な背景もある。

二つ目は、笑顔で赤ん坊と接していないこと。親と子の微笑み合いは重要で、それがなされないと赤ん坊は体調が悪くなる。ストレスを感じ、自律神経に支障を来たすこともあるそうだ。笑ったり、泣いたりしても何も反応されないと、やがて赤ん坊から表情が消えてしまう。

サイレント・ベビーはここ十五年増えてきており、少年犯罪の一因ではないかとする向きもあるようだ。自分の感情を表現する術がなく、理解者を得られず、最後にとるのがそれらの反社会的な行動なのではないか。スキンシップをすること、笑いかけること。それらは、親として決して難しいことを要求されているわけではない。子供の教育方法ばかりを考え、マニュアルと向き合うのではなく、まず我が子と向き合うことが大切なことではないか。

スパイ教育の際、いかに変装しても笑わぬように、といわれる。それは、笑顔にその人独自の面がでてしまうからだ。笑顔というその子の生まれながらの独自性を摘み取るのが、実の親の怠惰であってはならない。

（政治学科2年　原泰一郎）

薄れゆく「当然」の意識

人が人を傷つける――よく考えれば巷に溢れていることだ。同級生同士のいじめにはじまり集団リンチ、誘拐殺人、果ては戦争まで。人が人を傷つけるのは、もはや当たり前のことなのだろうか。そして幼児虐待もその中のひとつといえるのだろうか。

ここ数年、幼児虐待の事件が絶えることはない。日々のニュースに映るたび、非日常であるはずの事件は、驚く事件ではなくなっていく。そのようなニュースを見るたび悲しい気持ちになる。それは幼児だけではなく、加害者となる親に対してでもある。幼い我が子を傷つけ、最悪の場合、死に至らせる。その理由は様々にしても、我が子を殺せてしまう親が悲しい。核家族化が進み、育児に関して頼る人が近くにいない中で、子育てをする母親の気苦労は量りかねるものだ。だが、だからといって子どもを殺していいことにはならない。ただ、虐待といってもすべての幼児が死に直結するわけではない。途中で虐待が発見され、保護されることもある。それは不幸中の幸いなのかもしれない。

しかし、気がかりなのはその子どもたちの今後だ。自分の存在を守ってくれるはずの親から虐待されることが、取り返しのつかないトラウマとなる。彼ら彼女らがやがて大人になった時、はたして子どもを持ちたいと思うだろうか。自分も親のように虐待してしまうのではないか、そもそも愛情をどう注げばよいのかなど、「子どもを持つ」ということに対してネガティブになってしまっても、それは当然の結果だろう。いわゆる負の連鎖といわれるように、一世代の虐待は次世代へとその尾を引くのだ。

少子化社会といわれて久しい昨今、政府は育児サービスの充実などの政策を打ち立ててきた。それは経済面などで、いかに子どもを生みやすい環境を作るかが重要となっている。それはそれで大切なことだ。だが本当に大切なことは、今を生きる子どもたちではないか。人が人を想う。それは人が人を傷つける行為より大切で、当たり前な行為のはずだ。「当たり前」。失って初めて分かるその価値に私たちはいつも戸惑う。親が子どもを愛し、育てる。そんな当然とされてきたことが放棄され始めている時代に私たちは生きている。当然が当然でなくなってしまうかどうか。その行く末は私たちに委ねられている。

（哲学科2年　原俊太郎）

合コン特集 複雑なココロ内

経験者であれば「なんだそんなもの」と言うだろうし、未経験者は「怖いし面倒だ」と言うかもしれない。今回は、意見がかなり分かれるのを承知で合コンを取り上げてみた。

必見 合コンアンケート

男女合コンパ、略して「合コン」。男女の出会いの場として、テレビや雑誌で特集組まれている。

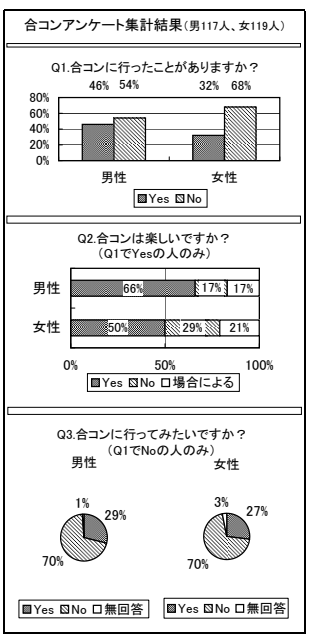
アンケートの結果、控えめあまり出会いを求めないという本学のイメージに反し、合コン経験者は四割に達した。また男女比では男子の比率が高く、普段から出会いを求めているようだ。対して女性は、相手を探すのも一色々大変で、今回は二〇人以上に知り合えるからという理由で参加した人が四分の一現状などを調査した。

意外に多かった経験者。彼らは合コンをどう捉えているのか。その約三分の二は「合コンは楽しい」と答えている。また「面子によって変わる」という意見も見られる。ただ、経験者の中にも「付き合いで」「暇気食い」という消極的な理由で参加する人も、ただし成功は保障できない。

だがやはり本学は合コンが盛んなようだ。未経験者の割合が高い。その中にも、行きたくないと思っている人が半数以上は嫌めなラインだ。中には「ニコニコしてただ座っていればよい」という冷めた意見もあった。面白い人になるかおとぐらかすイメージを保つ。どちらを選ぶかはあなた次第だ。

反対に、合コンで失敗したという要因として「緊張して喋れなかった」という「飲みすぎた」という約束なものが多い。さらに「相手が全員30代だった」「会費払われた」という笑うに笑えない経験を持つ人も。

成功も失敗も話の種になる合コンで。とはいえ、行く行かないは個人の自由だ。で、周りに流されずに自分のスタンスを守ってほしい。



こんな出会いもいいのかも

学生の考える合コンというものは、「自分基準」でいくほうがよいと思います。私は父の強い勧めがあり、父に認められたくて、法学部に入り、司法試験の勉強をするふりをしました。でも結局は、もともと好きだった英語の世界へと進路変更したのです。今はこの仕事がとても気に入っています。学生たちには自分の進みたい道・踏みだす勇気をもってほしいと思います。（取材・構成　佐藤貴裕）

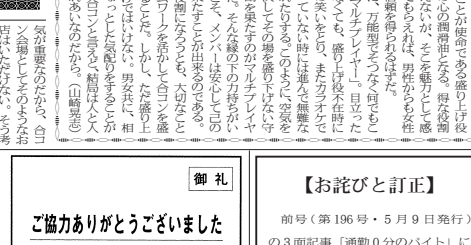
学生の考える合コンというものは、「自分基準」でいくほうがよいと思います。私は父の強い勧めがあり、父に認められたくて、法学部に入り、司法試験の勉強をするふりをしました。でも結局は、もともと好きだった英語の世界へと進路変更したのです。今はこの仕事がとても気に入っています。学生たちには自分の進みたい道・踏みだす勇気をもってほしいと思います。（取材・構成　佐藤貴裕）

合コンレンジャー！

合コンを手早くメンバーを集めるのはどうだろうか。王様ゲームや、一気飲みもいいだろう。しかし、チームを作るという画期的な方法がある。例えば、男性陣が役割分担をし、ひとりのチーム人一人が自分の個性を活かした役割を果たすようにする方法で、各々の使命がはっきりし、盛り上げやすくなる。

一方、女性側は男性陣を見て、自分に最も合うと思った役割の人を探せばいいだろう。この時、あらかじめ共役割分担表を紹介しよう。

まず、合コンにおいて必要不可欠な「幹事」。幹事が仕切り役となってメンバーを集め、全ての主導権を握り、責任を負わなければならない。合コンの出来不出来は幹事次第ともいえるので、盛り上げ役。積極的な姿勢で笑い



とをとることが使命である。盛り上げ役は、物心心の調和油とある。盛り役割とは言えないが、そこ魅力として感じとってもらえれば、男性からも女性からも頼を得られるはず。

最後に、万能型でそつなく何でもこなせるマルチプレイヤー。目立つ特徴はなくても、盛り上げ役不在時に曲がスムーズにいない時には進んで無難な曲をいれたりするこのように、空気を読んで決してその場を盛り下げない守りの役割を果たすのがマルチプレイヤーなのだ。そんな縁の力持ちがいるからこそ、メンバーは安心してこの役割を果たすことが出来るのである。

どの役割になったとしても、まずはチームワークを活かして合コンを盛り上げることだ。しかし、ただ盛り上げるだけではいけない。男共に、相手にちょっかいとか気配りをすることが大切だ。合コンと言うと、結局は人と人とのふれあいなのだから。（山崎晃志）

さて、事前の準備はできたのは合コン当日。お店で直接待ちあわせ、というパターンもあるだろうが、やはり他の場所で待ち合わせしてから向かったほうがいい。これはお店への移動時間に少しでも打ち解けておくことと、盛り上がりやすくなるからだ。もちろんアメリットもある。待ち合わせ場所にいる自分たちを選ぶから感謝され、最悪の場合相手に逃げられることもある。ただ、そんな相手とは実際に合コンをしても成功するはずもないので、無駄にお金を使わずにすんだと思っておこう。

さあ、お店に着いたらいよいよ合コン本番。ここまできっちりやっておけば大丈夫。ならない。あとはあなたの腕次第だ。（新原大輔）

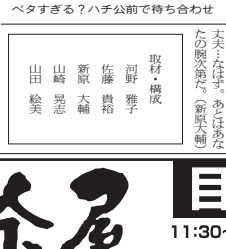
勝負は本番前から

自分たちが主催する合コンの場合、その日画段階から勝負が始まっているといってもいい。店選びから待ち合わせ場所まで、その合コンの成功率が大きく左右される要素はたくさんある。意外に重要な、合コンの準備段階に注目してみよう。

合コンをするときに、考えなければならないのが店選びだ。大抵、店目的以外にも、単に楽しく飲みたい、といった友達を接待したい、といった友達を接待するような感覚で参加するものも少なくない。

最後に、こうした新しい合コンのあり方についてのようにお考えなのか何ってみた。「やはり学生同士での合コンには違った雰囲気を味わえるのが大きなメリットだと思います。世の中を見回すという意味でも、同年代以外に出会いの場を広げていってください。」

様々な人と知り合えるのが合コンだ。彼氏、彼女を見つけるだけでなく、視野を広げるといった意味で合コンを捉えてみるのも面白いだろう。（新原大輔）


ペタすぎる？ハチ公前で待ち合わせ

見つめてみよう 自分の生き方

本コラムが始まり、一年が過ぎました。二年目最初となる今回は、英米文学科の眞野泰助教授です。

ついた嘘を忘れる

大学生の頃、親しくなり始めた女性に長長を頂かれました。背の低さに劣等感のあるわたしは、一六三センチと嘘をつきました。その後、付き合い続けていた彼女から、また同じことを聞かれ、一六〇センチちょっと嘘をつきました。そのときには何も言わないのですが、そのときに言ってしまったらしいのです。数年経ち、私たちは結婚しました。あるとき妻がにやにやして、「あなた昔が三センチ縮んだの知ってる？」と言うではないですか。ボケノとしている私に、妻はにやにやしながら説明しました。ここから導かれる教訓は、ついた嘘は覚えておけ、ということでしょうか。記憶力の悪い人間は嘘をつくな、かもしれませんね。

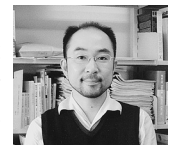
この種の嘘をつかないでいられる強い人を私は尊敬します。でも、そんな人はあまり多くない。人は好かれたい、認められたいという気持ちからついちょっとした嘘をつく。それは社会をつくる動物である人間にとってかなり自然なことのようにも思えます。

悪く言われがちな「他人基準」といわれ方ですが、「自分基準」でいくほうがよいと思います。私は父の強い勧めがあり、父に認められたくて、法学部に入り、司法試験の勉強をするふりをしました。でも結局は、もともと好きだった英語の世界へと進路変更したのです。今はこの仕事がとても気に入っています。学生たちには自分の進みたい道・踏みだす勇気をもってほしいと思います。（取材・構成　佐藤貴裕）


20歳の頃

あの頃 私も若かった⑥

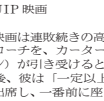
文学部英米文学科　眞野　泰助教授


現在の眞野助教授

PROFILE

一九九一年東京大学大学院修士課程英文学専攻修了。現在、本学文学部英米文学科助教授。翻訳書に『奇跡も語る者がいなければ』など。

映画



コーチ・カーター

監督　トーマス・カーター
出演　サミュエル・L・ジャクソン／アシャンティ
2005年／アメリカ／136分
配給　UIP 映画

この映画は連敗続きの高校バスケットボールチームのコーチを、カーター（サミュエル・L・ジャクソン）が引き受けるところから始まる。コーチ就任後、彼は「一定以上の成績を収める」「授業には出席し、一番前に座る」「試合の日は上着、ネクタイを着用」という一見練習とは関係がない規律を言い渡す。彼の厳しい練習により、チームは全米が注目するまでになったのだった。

だが、勝利の栄光に酔い痴りだした選手達は、大会で優勝した後カーターに内緒でパーティーに繰り出してしまう。挙句の果てに規律を守っていないことも発覚し、カーターは部員の成績が上がるまで体育館を閉鎖してしまった。学校側は抗議しマスコミも押し寄せ、カーターは解任させられる。荷物をまとめるカーター。しかし、閉鎖が解除された体育館を覗いてみると、コートの中では驚くべき光景が待っていた。

この映画が実話をベースにしていると知ったら誰もが驚くだろう。この魅力的な主人公を、今夏公開の『スターウォーズ　エピソード３』にも出演しているサミュエル・L・ジャクソンが好演した。その情熱にあふれた演技は、カーター本人が絶賛するほど。また、この映画の魅力の一つは豪華歌手陣が提供した音楽だ。チンギー、シアラ、さらに出演者であるアシャンティの楽曲もちりばめられている。

この作品はただのスポ根映画に留まらず、現実を見据えて将来を考えることの大切さを説いている。重きを置いているのは、人生のハイライトについてだ。高校の校長が「彼らのハイライトは高校でバスケをしているときだ」というシーンがある。確かにそうかもしれない。しかし、その一瞬の輝きのために先の長い人生を棒に振ってよいのか。犯罪や若者の妊娠にも焦点を当てており、享楽的な考えを改めさせられる、人間ドラマに主軸を置いた深い作品となっている。（山田絵美）


'05 8月、テアトルタイムズスクエア他公開

CAMPUS GUIDE

●世界民芸舞研究会
「梅雨！ライブ」
日時：6月12・19日
場所：常十見ホール
料金：無料
内容：ジメジメした空気を一掃するフリー企画やります！

●落語研究会
「めじろ寄席～襲名披露興行～」
日時：6月23日
場所：豊島区民センター6階ホール
料金：無料
内容：十一代目目黒亭白兎、初代目白梅帆長、初代目目亭豆蔵の襲名口上もあり。

●学生放送局
「GSRS2005年度第1回公演
～エラ呼吸のポンちゃ～」
日時：6月26日
場所：常十見ホール
料金：無料
内容：魚人の神秘についての理解が深まると思います。

●服飾会館
「めだが舞台」
日時：6月26日
場所：武田修館
料金：無料
内容：能（仕舞・素謡）の発表会です。

取材・構成
河野　雅子
佐藤　貴裕
新原　大輔
山崎　晃志
山田　絵美

「新たな出会い」を提供するお二人

御礼

ご協力ありがとうございました

今回の編集作業において多くの皆様にアンケートのご協力をいただきました。

皆様のご意見を参考に、紙面を構成させていただきました。ありがとうございました。今後ともよろしくお願いいたします。

学習院大学新聞社
黎明会館316号室　3986-0221（内線2607）
http://www-cc.gakushuin.ac.jp/~press

【お詫びと訂正】

前号（第196号・５月９日発行）の３面記事「通勤０分のバイト」に掲載致しました情報に誤りがありました。

計算機センターインストラクターの募集対象は、「指導教官の許可を得た物理学科・化学科の四年生・院生」ではなく、正しくは「三年生以上の学生・院生」と「指導教官の許可を得た物理学科・化学科の四年生・院生」でした。

計算機センターおよび、関係者の方々に深くお詫びすると共に、訂正致します。

成城大に大差で勝利

アメリカンフットボール部

本学の攻撃冴えわたる


一人一人が役割を果たし、相手を押え込む本学（手前）

5月15日、アミノバイタルフィールドにおいて、四大戦の対成城大戦が行われた。トーナメント戦のため、同大との対戦は2年ぶりであった。しかし本学は実力をいかんなく発揮し、50—7と大差で圧勝。相手との力の差を、まざまざと見せつける結果となった。今年度、思うように結果を出せなかった本学にとって、今回の勝利は価値あるものに違いない。今後、更なる飛躍を誓う本学は、確かな一歩を踏み出した。

今年度、新チームとなってから、まだ本学は勝ち星をあげていない。だからこそ、今回の試合はなんとしても勝ちたかった。「このチームでの1勝をあげるぞ」、試合前に伊藤隆佑主将（哲4）はメンバーに檄を飛ばしていた。

秋に向けてのチーム作りのため、今試合では、本学は試合経験の少ない下級生中心で挑んだ。そのため、第1クオーターはじめは緊張感から浮き足立ってしまい、チームとしてうまく機能していなかった。しかし、伊藤主将がチームをまとめ、皆が冷静さを取り戻していく。そして、坂田裕介選手（法4）のタッチダウンで待望の先取点を奪う。「最初の一本をとることが大切。一本とれれば波に乗っていけると思っていたので、早めにとれてよかったです」と伊藤主将は笑顔をみせた。

こうなると、試合は本学のペース。追加点も決め、一気に流れに乗った。この後も油断することなく相手のオフェンスも押さえ込み、13—0で第1クオーターを終える。

ところが、第2クオーターでは、なかなか得点をあげられない。だが、刻々と時間が経過していくなかでも、ディフェンスは集中力を切らすことなく成城大に得点を許さない。なかでも小又淳平選手（法3）のタックルが相手には脅威となっていた。そして、そのディフェンスが作ったチャンスをついにオフェンスがものにした。この絶好機に伊藤主将のタッチダウンで20—0とリードを広げる。そのまま、この得点差で第2クオーターは終了した。

しかし、第3クオーター立ち上がり、いきなり相手にタッチダウンを奪われる。20—7となるが、試合展開は変わらなかった。その後も、本学は粘り強く守り続け、オフェンスにつなぐ。オフェンスは、効果的なパスでリズムを作り、テンポよく攻める。そして最後は、ランによるタッチダウン。結局、このクオーターでは2回のタッチダウンを成功させ、35—7と相手を突き放した。

よい流れで迎えた最終クオーター。序盤こそ一進一退の攻防を繰り返すが、本学の好調なオフェンスの勢いは止まらない。再びパスやランで豪快にタッチダウンを決める。最後まで相手の攻撃を防ぎきると、50—7の大差で勝利した。

勝因を「オフェンスの活躍が大きかったです」と伊藤主将は言う。この試合、本学はけがによる欠場選手が多く、本来とは違うポジションでプレーをする選手が多かった。しかしながら、本学、特にオフェンス陣はそんな不安を感じさせない活躍を見せてくれた。

さらに伊藤主将は、「負ける気はしなかったです」という強気の発言も。それもそのはず、成城大は3部の下であるエリアリーグに属している。そのため、現在2部の本学から見れば格下の相手になる。そういった意味でも、実力の差は歴然だった。また、本学は秋に1部昇格することを目指している。ここでつまづくわけにはいかなかったのである。

最終的な目標を達成するのは非常に困難で険しい道だろう。そのためには、チーム力の更なるレベルアップが必要不可欠だ。しかし、下級生も経験を積み、確実に成長している。秋にはこのチームがますます成熟していることだろう。彼らの戦いは始まったばかりだ。

（嶋先伸人）

強豪校相手に善戦

剣道部男子・女子


相手選手の一打を防ぐ内山選手（左）

5月22日、明治大学和泉校舎体育館で第11回東京都学生剣道選手権大会、東京都女子学生剣道選手権大会（個人トーナメント）が開催された。今大会、本学からは男女それぞれ8名が出場。なかでも内山傑選手（営4・すぐる）、海保徹選手（営3）の男子2名が東京都剣道選手権大会の舞台まであと一歩というところまで迫る活躍を見せた。

選手を応援する拍手や竹刀を打ち合う音が響く中、海保選手は強豪校である大正大、国士舘大の選手とを1、2回戦で対戦。面で勝利を勝ち取った。「3回戦は落としたものの、強豪校とも互角に戦えることがわかり、手ごたえを感じています。自分自身の課題を消化しきれていなかったのが3回戦の敗因です」と語った。

一方、別のコートでは内山選手が活躍を見せていた。背が高く体格のよい内山選手が見せる上段の構えは、相手選手だけでなく観客までを圧倒する。その力強い剣道に、思わず観客から歓声が上がった。しかし内山選手は「2試合目は冷静に戦えましたが、1試合目は固くなってしまい自分の剣道ができませんでした」と評価する。3試合目は内山選手にも劣らない体格のよい選手。「上段の選手には気迫が必要なのに、逆に相手に押されてしまいました」と悔しそうに話した。実際、試合では相手選手に一本を先取されてしまう。奮闘するもなかなか技が決まらず時間切れになってしまい、3回戦敗退となった。

また、女子でも瑤子女王殿下選手（学習院女子大・日本文化4）、木村麻里選手（営3）が3回戦まで勝ち進んだ。瑤子女王殿下選手は2回戦、先に一本を取られるも、その後面が立て続けに決まり勝利をもぎ取る。「3試合目では手首を上げる癖が出てしまいました。けれど、1、2試合目では思うように動くことができて、今までよりいい試合になりました」と分析した。

小柄な木村選手は2回戦で、体格差のある国士舘大の選手と対戦した。試合開始直後、本学は一本を奪われる。それでも動揺することなく面で一本を取り返すと、その後は苦戦を強いられ、決定打が出ない状態が続いた。だが延長2分半、膠着状態が続いた後、見事一本を奪い勝利を手にした。木村選手は「国士舘大に勝てたことがまずうれしいです」と笑顔で語った。

秋には全国大会予選が始まる。晴れやかな選手の表情を見ると、秋には肉体的にも、精神的にも強くなった剣道部に出会えると確信が持てた。

（加藤亜祐美）

Replay

ダイビング部主将

前田　俊さん（政３）

青い世界に魅せられて

沖縄、宮古島の海。日光が青空から水中へ真っ直ぐ降り注ぎ、クロスホールの奥深くまで差し込んでいる——

前田さんがダイビング部に入部したきっかけは、ただ海に対する興味だけだった。

「入部するまでダイビングの経験が無く、水泳自体、小学校の頃にやった程度でした」

ところが入部後の伊豆への夏合宿で初めてダイビングをし、印象が大きく変わった。水中の無重力による浮遊感や景観の美しさを体験し、すぐにダイビングの虜になった。

「感動するばかりで、初めてタンクを背負って海に潜ることへの恐怖感は、全く無かったですね。ただ、水の中に身体が潜っていく感覚だけに気を取られていました」前田さんは感慨深げに語る。

海中でのことについて尋ねると、「とにかく景色が綺麗ですね」と嬉しそうに話しはじめた。「クロスホールと呼ばれる×印の形に開いた岩の亀裂や、洞窟の中を探検するんですよ。壮大な地形に圧倒されます。それに魚の種類も多く、イルカやマンタが目の前に来て触れたり。すごく楽しいです」心底ダイビングを愛しているのだろう。前田さんの口調が弾む。

しかし楽しいばかりではない。スキューバダイビングは1回あたり小1時間程度のものだが、その間は気を抜くことはできない。小さな失敗が大きな事故につながりかねないのだ。「合宿はインストラクターをつけずに行くんです。だから事前のミーティングやレスキューの練習など、安全には非常に気をつけていますね。ただ楽しむだけではなく、楽しいダイビングができるよう、練習を厳しくしています」。

最後に、前田さんは「海は自然のものなので、波の流れなどは自分たちでコントロールできません。けれど、自然物だからこそ、人それぞれ無限の楽しみ方がありますね」と、ダイビングと海に対する想いを熱く語っていた。

社会と同様に、楽しさと厳しさが居合わせる海の世界。その美しく広大な自然の中での経験から、前田さんは好きだからこそ厳しくやるということを教わったようだ。

（小倉正也）

四大戦の壁厚く

バスケットボール部男子


ゴール下で競る石井選手（左）

「勝つだけでなく、今後につながるような試合にしたいです」。そう山田紘史主将（済4）は試合前に語ってくれた。5月8日、成城大学体育館。歓声が響き渡る。四大戦の最後となる、対成城大戦だ。自分たちのプレーができれば勝てるはずだった。

前半、最初に得点したのは成城大。本学はそのまま得点を連取され、相手のペースに飲まれていく。相手の流れを食い止められない。完全に主導権を握られたまま、前半終了時には8—46という厳しい状況に追い込まれた。

気持ちを切り替えて後半戦へ突入。前半とは違い、本学選手がボールに食いついていく。そしてチャンスが訪れる。矢島壮選手（済4）へボールが渡り、シュート体勢に入る。ボールがネットに吸い込まれた。勢いづいた本学にベンチから声援が飛び交う。形勢逆転なるかと思われた。だがその直後、あっさり点を奪われてしまう。再び成城大の流れになるかと危ぶまれたが、その不安は石井亮太郎選手（営1）の見事なゴールで一瞬にして吹き飛んだ。再び大きな歓声が沸き起こる。これを機に本学は一気に巻き返しを図った。激しい攻防。相手の3ポイントシュートにも屈せず、瞬く間に本学は体勢を立て直し次々とシュートを放っていく。が、無情にも試合終了を告げるブザーが鳴り響いた。51—86。後半流れは本学にあったが前半の点差を埋められず敗北を喫した。結局、四大戦はまさかの4位という結果に終わった。

試合終了後、山田主将は「細かいミスが積み重なって、相手の大量得点を許してしまいました」と振り返る。今試合ではディフェンス、速攻、リバウンドが人任せになりがちだった。そんな中、好プレーを見せたのは石井選手だ。常に強気でゴールを目指す姿勢は今後に期待できる。

四大戦が終わった今、次なる目標は甲南戦と秋季リーグ戦での優勝だ。本学は今回得点のチャンスを掴むも、上手く活かせていなかった。だが、これを克服したあかつきには、きっと彼らが目指している新たな活躍の場が待っていることだろう。

（平峯さとみ）

本選へ向け快走

自転車愛好会


必死にペダルを踏む亀山選手

5月21日、伊豆CSCにて全日本学生選手権予選会が行われた。出場者数は141名。うち上位約50名が本選の出場権を得ることができる。本学からは亀山祥平選手（法3）が出場し、見事34位と本戦への切符を手に入れた。

レースが開始すると、亀山選手は事前の緊張を吹き飛ばすような快調な滑り出しで10位につける。ところが4周目、スタート地点手前の上り坂で完全に体力を奪われてしまい、5周目にはとうとう先頭集団からちぎれてしまった。先頭集団との距離が開く。だが先頭交代を繰り返すうちに体力が回復し、心に余裕ができはじめた。同時に予選通過の不安が頭をよぎる。——ここにいたのではだめだ。亀山選手は再びペースをあげた。

そして最終8周目のスタート地点、亀山選手と2人の選手が集団から飛びだした。3人での先頭交代が続く中、少しでも早くゴールに、と考えていた亀山選手が2人を引く。だが、ゴール地点間近の上り坂で再び疲労の波が押し寄せてきた。3人ほぼ同時にゴール。惜しくも亀山選手は3人の中で最後のゴールとなってしまった。しかし順位は34位と無事に予選通過。この結果に対し、亀山選手は「予選を通過したので、安堵感でいっぱいです。順位はこの大会に限ると、本学の過去最高の成績。よくやったと思います。本戦ではもっと上位を目指したいです」と語った。

先輩に「今後もかなりよい成績が期待できる」と言われたことが次のレースへの励みになる。本選、そして、夏に行われるインカレに向けて、亀山選手は今日もペダルをこぎ続ける。

（長谷川さよ）

TOPICS

その他の試合結果

【バレーボール部男子】▼春季関東大学男子5部バレーボールリーグ▽対関東学院大3—1▽対帝京大3—2

【バレーボール部女子】▼春季関東大学女子3部バレーボールリーグ▽対育英短大0—3▽対東京学芸大0—3

【ホッケー部女子】▼春季関東学生ホッケーリーグ▽対早稲田大0—2▽対法政大0—1

【ホッケー部男子】▼春季関東学生ホッケーリーグ▽対中央大6—0

【バドミントン部女子】▼関東大学バドミントン春季リーグ女子3部A▽0勝5敗　6位　降格入れ替え戦へ

【バドミントン部男子】▼関東大学バドミントン春季リーグ男子4部B▽2勝3敗　4位　4部残留

デスクの片隅

私はいわゆるうっかり者だ。買い物に行けば何かを買い忘れ、電車の時間は間違える。そして、あとで面白いほどあたふたしてしまう。「水戸黄門」のうっかり八兵衛以上にうっかりしているのだ▼新聞社の作業においても同じことが言える。題字の柄指定を忘れたり、見出しの文字数を間違えるのは日常茶飯事。そのたび、ほかの部員に助けられてきた。黄門様御一行がいないと何もできないうっかり八兵衛と変わらないのだ▼前号の業務では立て続けにミスをおかした。行数オーバーや、レイアウトの無意味な変更、さらには詫び記事まで出すことになってしまったのである▼その時やっと私は気づいた。これはうっかりではなくだらしないだけなのだと。もう少し気をひきしめて確認をしていれば、こんなことにはならなかったはずである。これらは私の怠慢が引き起こしたものなのだ▼うっかり八兵衛はそそっかしいが、一生懸命である。だから黄門様御一行も彼に手助けをするのだろう。私は八兵衛のようにありたい。（雅）